



人間万事塞翁が馬

吉田 雄一

鳥取大学医学部感覚運動医学講座皮膚科学分野教授

「まさかあの病気に治療薬ができるとは思わなかったよ」というお言葉をある先生からいただいた。あの病気というのは神経線維腫症1型(NF1, レックリングハウゼン病)である。本邦において2022年9月に症候性かつ手術不能な叢状神経線維腫を有する小児のNF1にセルメチニブ(MEK阻害薬)が認可されたのは自身にとっても驚きであった。

記憶を遡ってみると、NF1の患者さんを数多く診察するようになったのは2002年ごろからである。たまたま、当時の上司が神経皮膚症候群(難治性疾患克服研究事業)の研究班班長となったのがきっかけであった。筆者は事務局長を拝命していたが、その上司が病気で療養が必要となり「あとはすべて頼んだ」といわれ、万事休すかと思われた。しかしながら、別の研究班で班長をなさっていたある先生がおっしゃっていたことをふと思い出したのである。「その病気について何がわかっていて何がわかっていないのかがよくわからなかったので、過去の論文を全部調べた」と。そこで覚悟を決めてNF1に関する過去の主要な論文をあらかた読み漁った結果、自分の中でNF1という疾患に対するスタンスが驚くほど明確になったのである(上司は約半年で全回復し、無事復帰しました)。

それ以来、主にNF1の日本人患者さんの臨床研究をコツコツと積み重ねて現在に至る。まさに「人間万事塞翁が馬」で、このときの貴重な経験はその後の皮膚科医としてのキャリアにとっても役立っている。努

力は必ずしも報われるとは限らないが、自身の成長には必ずつながる。そして、ときとして気まぐれな神様はご褒美(新薬)をくれ、診療に対する明日への活力を与えてくれるのかもしれない。

2024年度から医師の働き方改革が本格化し、医師の時間外労働に対する規制が始まった。昨今、勤務時間と自己研鑽の取り扱いについても盛んに議論されるようになってきている。医師である以上、重症患者さんへの対応、困っている同僚や後輩に対するサポート、学会発表の準備や研究などで帰りが遅くなることもあるだろう。しかしながら、振り返って考えてみると苦労した経験ほどよい意味で得るものは多かった(もちろん、ハラスメントは問題外)。

近年、乾癬、アトピー性皮膚炎など、皮膚科は新薬ラッシュであるが、それは皮膚科医のたゆまぬ努力の賜物ではないかと感じている。患者さんにとっても福音であるが、良性の疾患に対する新規薬剤であることを念頭に置き、とくに小児に対する長期的な使用についてはくれぐれも慢心しないように、逆の意味で「人間万事塞翁が馬」ということわざを心にとどめておきたい。